

---

## 謝 辞

### 三 神 和 子

(文学研究科英文学専攻主任)

加藤雅子先生は日本女子大学の英文学科及び教養科目の英語を 40 年以上にわたって守ってこられました。生田キャンパスが出来る前の日本女子大が目白にしかなかった時代から、先生はずっと英語教育に携わられ、日本女子大の英語教育がどうあるべきかを考え、中心になって進むべき方向を定め、責任者としての任にあたられました。特に加藤先生が熱心に取り組まれたのは LL を使用しての指導です。新しい機材を導入するときには責任者となって業者と折衝され、創立百周年を祝って 2001 年に百年館が新築されたときには LL 教室のデザインにもあたられました。先生のお人柄と同じ暖かい雰囲気の教室になりました。

ほんとうに加藤先生は暖かいお人柄で、品格高く、我々教員が見習うべきところ多い同僚です。なんと言っても、日本語が美しく、お声も澄んでいて美しいのですが、どんな時にも敬語をはずすことなく、相手を敬ってお話になります。それは先生の生き方を如実に表しており、どんな時にも、たとえ相手が難しい人でも、人間としての品格を損ずるような態度をおとりになることはありません。その品格は先生が、真の意味で、芯がお強いことによって保たれているのだと思います。もちろん、お育ちの良さもあると思いますが。とても観察眼が鋭く、皆のことをよく見ておいでなので、それでいて先生は人のよいところを認め、きちんと優しく暖かく対応なさいます。このようなことができるのは、芯がほんとうにお強いのだと私は

---

いつも先生に尊敬の念を抱いておりました。

そのような加藤先生を慕って、多くの学生が卒論の指導を受けたいと集まりました。先生のご専門は子供の言語と脳の発達の係わりに関すること  
で、学生には少し難しいところもあるでしょうが、先生はわかりやすいよ  
うに工夫されて指導され、また先生の研究のレパートリーも広いので、先  
生のもとに多くの学生が集まったのです。大学院においても、学生のよい  
ところを見つけて励ます優しい先生でいらっしゃいます。

このような加藤先生が大学を去られることは、私たち同僚に取りまして、  
また日本女子大学にとりまして、大きな痛手にはなりません。幼稚園か  
ら日本女子大に通われ、アメリカに留学されて研鑽を積まれる以外は、助  
手としてまた教員として女子大に勤められ、女子大の歴史と変化を見てこ  
られた加藤先生は、まさに女子大の申し子であり、女子大を支えてきた方  
といえます。先生のご定年に際して、心からの感謝を申し上げるとともに、  
寂しいという気持ちは抑えきれません。どうぞお身体大切にされ、これか  
らもご活躍くださいませ。ご多幸をお祈り申し上げます。

---